

週刊「タバコの正体」—高校における新しいタバコ教育の試み—

和歌山県立和歌山工業高校 教諭 奥田 恭久

【目的】

中高生の喫煙に対しては、世の中の大人たちや高校教師でさえも、その現状を見て見ぬふりをしているがちである。喫煙している子どもたちに街中で注意を与えようにも気まずい思いをする風潮が蔓延している。学校現場では喫煙生徒を見つけて“謹慎”を申し渡すことが広く行われてきたが、これは“謹慎”というペナルティーが学校生活を成り立たせるための効果的で無難な方法であるからにすぎない。旧態依然としたタバコへの接し方、つまり「タバコを吸った奴に罰則を与える」という取締まる方法を見直し、タバコを吸わせない教育をする方法としてタバコに関するリーフレットを毎週作成して配布したので紹介する。

【方法】

タバコの有害性、ニコチン依存症、ガンとの関係など、正しい情報を定期的に生徒に与えることを主眼におき、和歌山工業高校では2005年4月から毎週、タバコに関するリーフレットを作成し、各クラスのホームルームで配布してきた。リーフレットは1000文字程度を1枚にまとめたもので、週刊「タバコの正体」と題して、医師（呼吸器科、歯科、内科、保健所など）、弁護士、作家、教師、禁煙活動家など、さまざまな分野の方に協力を得て、通算約70話ほどを発行した。なお配布法としては、ホームルームで担任が配布することにより、毎週必ず全校生徒が「タバコの正体」を受け取り、読む方法をとった。読書時間はおおむね10分程度であった。

【結果・考察】

アンケート調査により、「タバコを吸うのはカッコ悪い」「一生、タバコを吸わない」と考える生徒の比率が上昇し、「友達が、タバコを吸っても平気だ」「学

校で、タバコの煙を見ても平気だ」と言う生徒は減少し始めた。

50分授業を1単位とする学校の時間割においては、週刊「タバコの正体」の読書時間10分は、0.2単位程度の授業に相当する。時間割表には表れない、タバコを吸わせない教育の方法として、その有用性が示唆された。

